

3 3年次「いいなんゼミ」の取組

(1) 目的

自ら課題をみつけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を身につける。学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方、生き方を考える。

①問題解決能力

主体的に「課題」を設定して計画を立て、問題解決していくことによって、計画性、実践力及び問題解決能力を養う。

②自主性、創造性

自主的、継続的に学習する姿勢と探究的、創造的な態度と能力を身につける。

③学習の深化

各教科・科目で学習した知識・技術を関連させる力を養うとともに学習の深化を図る。

④主体的に生きていく姿勢

課題解決により、達成感、充実感を味わい、自分自身への自信、自身の進路希望へ意欲を高める。

(2) 今年度実施内容

月	取 組	備 考
4月	「いいなんゼミ」ガイダンス 担当教員とテーマ確認 生徒用予定表配布	第1回、第2回担当者会議（アンケートの取り方について、図書の利用、著作権について）
6月	年間計画書作成	第3回担当者会議（進捗状況報告、中間発表会について）
7月	ゼミ内中間発表会 1学期研究活動報告書作成 夏休み活動計画書作成	1学期評価（文章評価）
9月	夏休み研究活動報告書作成 年間研究活動計画書の確認・修正	
11月	いいなんゼミ報告書作成開始 発表会に向けてPP作成、発表練習	第4回担当者会議（報告書・発表会について）
12月	いいなんゼミ報告書提出 ゼミ内最終発表会 学年発表会	第5回担当者会議（学年発表会選出） 第6回担当者会議（本番発表者選出） 2学期評価（文章評価）
1月	発表代表者PP作成、発表練習 展示・実演・ポスターセッション準備 発表会当日にむけて仕事分担	
2月	いいなんゼミ発表会 出前ゼミ（飯南中、飯高中）	3学期評価（文章評価）

(3) 今年度活動内容（テーマ一覧）

岡ゼミ

- ・ 補助犬について
- ・ 視覚と触覚
- ・ がんについて
- ・ 箱庭を作ろう！
- ・ かわいくて面白いエプロンシアターを作る！
- ・ 1歳頃の子どもが遊ぶおもちゃ作り
- ・ 理想の介護施設を考える
- ・ 子どもが興味をひくおもちゃ作り
- ・ バルーンアート

坂元ゼミ

- ・ テーブル作り
- ・ 生物解剖
- ・ 実際にベンチを製作
- ・ モーター製作
- ・ 包丁の違いと日本刀との関係
- ・ カビの生え方
- ・ 机作り ～西平クラフト～
- ・ 本棚作り
- ・ 木でベンチ作ってみた

佐藤ゼミ

- ・ 苔盆栽本気のフラワーデザイン
- ・ 猫背の改善
- ・ 食育
- ・ オクラの生育と光環境
- ・ 汚れの落とし方
- ・ 肥料濃度の違いによるキュウリの生育比較
- ・ トマトの生育調査

正高ゼミ

- ・ フリースローの確率を上げる
- ・ 剣玉で「もしかめ」してみた
- ・ キックサーブの高さ測定
- ・ 柔軟性を高めるには
- ・ 握力
- ・ 体を強くする
- ・ 新体力テストの数値向上
- ・ ジャグリング

多賀ゼミ

- ・ 聴覚障害者の住みやすい町にするには
- ・ くせ毛に魔法がかかるとき
- ・ 視力を良くする方法
- ・ バナナで記憶力は向上するのか？
- ・ 遊園地ってすげえ！！
- ・ コロナウイルスに負けない元気ある飯南・飯高にしたい
- ・ 木の手帳を多くの人に伝えるために
- ・ 匂いの成分を抽出する
- ・ 近視・遠視の謎！

玉井ゼミ

- ・ 1年間でキーボードがどれだけ弾けるようになるか
- ・ 1年間でどれくらいピアノを弾けるようになるのか
- ・ 漢字検定上級取得を目指して
- ・ オノマトペ
- ・ アナウンスしてみた
- ・ 正解へのアプローチ方法（特に算数面積）
- ・ 初心者がクラリネットで J-POP 吹いてみた！
- ・ 多声類・覚声類

仲ゼミ

- ・ 暗記について（学力UPにつなげる）
- ・ 絵を通じて自分の考えを伝える
- ・ 韓国のすべてについて知ってもらいたい
- ・ 様々な頭身のキャラクターを描けるようになる
- ・ イラスト上達法～初心者の自分が上手くなるために必要なこととは～
- ・ この1年間でスペイン語を身につけられるか？
- ・ アナログとデジタル！！
- ・ 自分で漫画を作ってみた
- ・ 一年で絵を上達させる

堀口ゼミ

- ・ タッチタイピングの習得とタイピングスピードの向上
- ・ Youtube でゲーム配信
- ・ お弁当作りにおける時間短縮の工夫
- ・ シミュレーションアプリを用いたバーチャル株取引
- ・ 嫌いな野菜を食べるためのレシピの検証
- ・ フリマアプリを使い利益を得る
- ・ クロスステッチ刺繍のファブリックパネル制作
- ・ 手縫いで作るパッチワークの基礎
- ・ 手縫いで作る布マスクとリスク低減効果

宮崎ゼミ

- ・ 地域のことを物語にして伝えよう
- ・ 飯南高校について
- ・ 美しいネイルについて
- ・ 自分に合ったダイエット法
- ・ 半年間でどれくらい体脂肪を減らせるか
- ・ 初心者が美容師実技試験合格ラインに達することができるのか？
- ・ 田舎の働き方
- ・ 半年間のダイエット
- ・ 日常生活による体重の増減

(4) テーマ設定について

①探究につながる問い作りと解決への手立て

いいなんゼミでは、生徒自らの興味・関心から研究テーマを自由に設定し、1年を通してそのテーマを調査・研究・作品制作・発表を行い、P D C A サイクルを取り入れた活動を通して課題解決能力を養う。今年度のテーマ分野については、図1の通りである。

いいなんゼミの研究テーマの設定についてはその仕掛け作りとして、2年次キャリアデザインにおいて、産業能率大学の皆川雅樹准教授による問いの立て方ワークショップを実施した(図2)。ここでは生徒それぞれが、いま自分が置かれている現状から達すべき数値、成すべき状態、目指すべき具体像を目標として設定した。そして最終的に目指す事柄について、それをやる意味、意図や目的を明らかにすることで、生徒主導の活動にと

どまることなく、生徒主導の活動に大人も巻き込んで社会に参画していく事をゴールに置くことを生徒・教員が共通の認識とした。探究につながる問い作りについて、「私(自分)の解決すべき課題」から「私たちの解決すべき課題」へ、そして「社会・世界の解決すべき課題」へと発展させ、そこから得た知識から、さらに自分のあり方(存在意識)を考えることをめあてとして個々に課題設定を行った。

ワークショップ後の生徒の感想からは、「Beingから考えていくことによって、自分で問いを作り、より細かな問題に新たに気付くことができるようになり、問題に向き合うことの大切さを学んだ」、「これまでの自分は原点である Being ではなく

分野	集計
美容・健康	13
運動・身体機能	8
語学・学習方法	7
地域研究・地域連携	7
農業・園芸	7
保育・介護福祉	7
イラスト・マンガ	6
製作・加工・技術	6
演奏・歌唱・アナウンス	5
調理・被服	5
商業・情報	4
生物・科学	4
総計	79

図1 いいなんゼミ分野別テーマ数

Doing から理想や目的を考えていた事に気がつき、Being から理想を考える事を学んだ」、「ひとりで考えるより人から質問された方が、自分で気づけなかったところまで気づける」、「将来に向けての疑問を持つことということから、どんな些細な事でも質問をすることが大切だと気付きました」など理想からゴールへの道筋とともに、「なぜ学校でいいなんゼミを学ぶのか？」の理解が深まったと言える。

図1からテーマを分野別に分析すると、美容・健康、運動・身体機能の分野が全体の27%を占めており、これらは自己の在り方に直接的に向き合う課題と言える。残りの73%については、これまで学んできた系列学習をステップにした将来の夢や進路に関わるものであり、自己の生き方にアプローチする課題と言えよう。これらを「社会・世界の解決すべき課題」として、本校の目指す地域貢献のための学習活動へと発展させるための第1歩を「地域への関わり」を指標に考察すると、全体の79テーマに対し19テーマである24%が、大学・専門学校、企業・法人・官公庁とフィールドワークや講義などを通じ、地域社会と連携して活動するに至った。

本校のいいなんゼミのさらなる深化のためには、「地域への関わり」をさらに誘発させる必要がある。そのためには、1年生からの体系的な「問いの立て方」へのアプローチがキーポイントであり、問いそのものを再構築していくための仕掛け作りが今後の指導の課題である。



図2 産業能率大学 皆川雅樹准教授による問いの立て方ワークショップの様子

②ゼミ内での意見共有と専門的知識を持った伴走者とのマッチング

今年度は、新型コロナウイルス感染予防措置による臨時休業のため、例年より2ヶ月遅れの6月からのスタートとなった。限られた時間の中で、感染予防対策も取りながらの学習活動は試行錯誤の連続であったが、昨年度同様、地元企業や行政・大学・専門学校などの協力に加え、オンラインによる講義や電子メールを介しての指導など新しい活動も取り入れた。最初の授業では、2時間分を使ってゼミ内でのメンバー間の課題共有の時間とした。それぞれが取り組んでいきたい内容を対話し、質問し合いながらより具体化し明確化していきながら、「なぜ学校で学ぶのか」をコロナ禍の中で実感として受け止めた。

そして学期ごとの中間報告会に加え、ゼミ内で学期に1～2回の課題の進捗度を共有する機会を意図的に設けた。KJ法を用いて質問、アイデア、意見を付箋でもらうことで、それらを整理し解決策について意見を出しあった(図3)。これまで取り組んできた活動をアウトプットすることにより、研究のプロセスの共有に加

え、自分の「評価のものさし」は正しいか、また、その目盛りの取り方は正しいのかなど、ゼミ内での議論や質問に対する考察から新たな気づき生まれ、PDCAサイクルによるプラス方向のスパイラルへと発展がみられた。



図3 ゼミでの課題共有の様子



図4 校長に外部協力者を依頼

また、研究初期の段階から外部人材と繋がることを推奨した。図4は、企業の経営者と繋がるために自分の研究テーマや研究計画について校長に伝え、マッチングを依頼する様子である。このマッチングには授業担当以外の教員も一丸となって協力することで、多種多様な分野へのアプローチが可能となった。

今年度マッチングが成立した連携先は、もくいち・マルゴ(株)、(株)三ツ知、(有)上野屋、道の駅飯高駅、道の駅茶倉駅、(有)あびや、岡三証券(株)松阪支店、(株)モビリティランド、積水ハウス伊勢明和展示場、松阪市こども発達支援センター「そだちの丘」、松阪市社会福祉法人ボランティアセンター、高田短期大学、旭美容専門学校、松阪市北部学校給食センター 他、19件であり、協力を希望したすべての生徒の連携が実現した(図5、図6)。生徒の取り組みを深化させるためには、大学や地域社会の大人たちを伴走者として早期にマッチングさせた活動が有効であり、連携を促進することで生徒のポテンシャルを引き出すことが可能となった。

しかし、その一方で、「専門家に言われたからやった」と答える生徒も一部に存在していたことも事実である。論理的矛盾点について、報告書の作成段階でゼミ担当者の問いかけから顕在化したが、この問題は伴走者と生徒の間で潜在化しやすく、対応が遅れる可能性が高い。伴走者も従来型の学校教育を受けてきた世代層であることを鑑み、自走する生徒を育て、支援し、伸ばしていけるよう、教員には伴走者と生徒の両者を支える役割としてのファシリテーション力が求められる。



図5 (有)あびや様によるオンライン授業



図6 岡三証券(株)様による来校での指導

(5) 生徒活動の成果

①地域連携

ア 高田短期大学との連携

a 対象生徒とテーマ

保育士志望生徒2名

「子どもが興味をひくおもちゃ作り」

「かわいくて面白いエプロンシアターを作る！」

b 授業日程

第1回：11月6日(金) 第2回：11月26日(金) 第3回：12月8日(火)

c 授業内容

7月に協定を結んだ津市の高田短期大学から講師を招き、3回にわたり直接アドバイスをいただいた。それぞれのテーマに沿った製作過程の作品である布絵本・エプロンシアターを講師先生に見ていただき、具体的な指導を仰いだ。作品の改善点をご指摘いただき、それぞれが改良して披露し、さらには子どもたちを引きつける方法を伝授いただいた。自分たちがつくった作品を用いて、保育士のプロである講師の実演も行われた。



d 学習成果と課題

保育士志望の2名にとって、大変貴重な授業となった。生徒たちは熱心にメモを取り、先生の話に耳を傾けていた。作品製作に力を入れていたが、いかに披露するかも大事であるという気づきがあり、オリジナルの歌を講師と製作するなど、視野が広がり生徒たちの著しい成長が見られた。

生徒たちは、「自分の作品に自信がなかったが、良いところや直すところを的確に知ることができ、成長できた良い時間だった」と授業を振り返った。また、進学先の先生でもあり、「高田短期大学でまた授業を受けられるのが楽しみ」と希望を胸に膨らましている。講師からは「先生の楽しそうな様子は子どもにも伝わるため、まず自分が楽しむことが大切」という助言を受け、下級生の前で緊張しながらも作成した「オリジナル絵本」や「エプロンシアター」を楽しく披露できた。

今回は新型コロナウイルスの関係で臨時休業期間があり、後半の11月から3回の連携授業となったが、早い時期からの連携がより教育的効果が高まると考えられる。また、同じ講師による指導を受けることができたため、生徒も先生の人柄に心を寄せて授業を受けることができ、講師にも生徒の成長を見届けてもらうことができ、一層効果的な連携となった。

イ 地元企業や地域との連携

- a テーマ：「新型コロナウイルスに負けない元気ある飯南飯高にしたい」

新型コロナウイルス感染症が流行していく中、この生徒は「地域のために高校生ができることを考え行動するべきだ」として仮説を立てた。その3つの仮説（「従業員が出勤できず物が売れない」、「物が売れないから売り上げが減る」、「物流が止まり物を運べない」）を検証するため、5社の企業へ話を伺いに行った。しかし、「コロナの影響で、お家ご飯が増えて売り上げは上がった」と話を聞き、仮説が間違っていることが分かってきた。さらには「高校生にできることはない、企業にお金を落とすことが一番企業のためになる」といった、厳しい意見ももらうことにもなった。そこで方針変更して、以下のような活動をするに至った。

まず、応援団 Circle の Instagram や Facebook アカウントを利用した活動を進め、高校生目線での地元企業の投稿シェアやPRを行った。「30日投稿プロジェクト」を企画して SNS アカウントの活性化を行いながら、多くの方に見てもらえる工夫をして企業を後押しした。さらに、自らの活動も積極的に発信しながら地域との繋がりを意識した投稿を行った。

また、地域と積極的に交流しながら活動する過程で、花火師と SNS で繋がることができた。その縁もあり、文化祭実行委員も巻き込んで地元へ足を運んで資金集めをし、文化祭で打ち上げ花火を実施した。この企画には地元から感謝の電話が何件も入り、高校生が地域に元気を届けられた瞬間であった。



- b テーマ：「飯南飯高に恋した高校生が地域の魅力を発信してみた」

この生徒は、第5回全国高校生 SBP 交流フェアで全国6位以内に入賞した「木の手帳」の製作段階から関わってきた。自分たちの良い物を作ろうと取り組んできたが、消費者意識が弱かったのではないかと課題を持って1年間取り組んだ。

まず購入者への追跡調査を行い、メリットやデメリット、改善点等をリサーチした。その結果、高校生らしい手帳への想いを伝えることが大切だと気付き行動するに至った。そこで電子商取引の授業と連携してラッピング製作に取り組み、手紙に手帳への想いを手書きして挿入した。また、コロナ禍でどう売り上げるか考え、本校OBと協議を重ねながらホームページを作成し、木の手帳の製作ストーリーを綴りながら、ブランド価値を高める工夫をした。

この活動を通して一層地域への恋心を高めることになったが、その過程で企業目線の視点を獲得することができ、今後のキャリア形成の一助となった。

②ポスターセッションによる発表

例年、飯南産業文化センターでのいいなんゼミ発表会では、発表の休憩時間（前半4発表と後半4発表の合間）を利用して、ポスターセッションと作品展示も行っている。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、日程をずらして会場を本校に変更することで独立させた。これは初の試みであり、保護者、関係者、本校1・2年生を対象として実施した。当初は3密を避けることが主目的であったが、3教室を使用することができたため、例年よりもスペースを広く取ることができ、見学時間を長く取れたことは利点となった。この利点を活かしてポスターセッションによる「より興味のある聴衆へ情報を深く狭く伝える双方向のコミュニケーション」を促すために、「ありがとうカード」をその場で手渡す仕掛けづくりを試みた（図7）。

2020年度 いいなんゼミポスターセッション・実演発表 ありがとうカード

年	組	席	名前	より		
すーま			発表者	さんへ		
ポイント						
伝言通財	配色、文字の大きさや文字物は適切でした。	5	4	3	2	1
聴感	声は、聴感、身だしなみはどうでしたか。	5	4	3	2	1
表現力	声の大きさや各種なと聞き手を動かしつづけてお話をされましたか。	5	4	3	2	1
論理的	質疑応答をわかりやすく説明できていましたか。	5	4	3	2	1
思考力	数字やグラフなども使って説明はは明瞭化されましたか。	5	4	3	2	1
総合評価		5	4	3	2	1
【良かった点】						
【要望】						

図7 ありがとうカード

この仕掛けにより、印象に残ったテーマについて参加者がカードに記入し、発表者に直接手渡すことが質問のタイミングや説明のきっかけとなり、活発な取り組みになった。発表者からはリアルタイムな反応をカードの枚数として可視化できたことで達成感を得ることができ、「こんなに発表を聞いてもらえたことがうれしい」との意見が多く好評であった。

選抜30人によるポスターセッションは、実演4件、展示物17件を含むものであった（図8）。実演については、「かわいくて面白いエプロンシアターを作る！」や「子どもが興味をひくおもちゃ作り」など、保育士を目指す生徒の実演は大変人気があった（図9）。展示についても、クロスステッチ、手作りマスク、パッチワーク、イラスト、木材を加工した机やいすの製作など、1年間しっかりと取り組んだ作品が並び来場者を楽しませた。



図8 学校でのポスターセッション



図9 学校での作品展示と実演

③いいなんゼミ発表会

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、いいなんゼミ発表会では初となる分散会場方式を導入し、リアルタイムでオンライン配信を行ったことが新たな試みである。1・3年生は飯南産業文化センター、2年生は本校環境総合実習室、連携中学校である飯南中学校・飯高中学校は各中学校、県教育委員会は県庁、その他関係者などが各地からZOOMで参加した。技術面ではBEACON様のご協力を頂き、分散会場からの双方向での質疑応答や、閉会式では教育委員会からの講評がZOOMで行われるなど、新しい生活様式における今後の学校教育を示唆する取り組みとなった(図10)。

いいなんゼミ発表会では、原稿に頼ることなく自らの研究を自らの言葉で発表することを目指した。今年度も飯南・飯高地域の素材を使った商品開発を通して地域活性化を目指す取り組み「飯南飯高に恋した高校生が地域の魅力を発信してみた」や、飯高町にゆかりのある小津安二郎を題材にした「地域のことを物語にして語ろう ～小津安二郎編～」など、地域に根ざした研究発表があった。さらに、登場から発表の最後まで、途切れることなくジャグリングをしながらの報告や、会場との掛け合いの面白さが際立った食育紙芝居の実演など表現方法にも工夫を懲らし、研究の成果だけでなく生徒のプレゼンテーション力の成長を感じられる発表会となった(図11)。

また、受付、照明音響、配信用ビデオカメラの操作、新型コロナウイルス感染症予防対策としての消毒係などすべて生徒が担当し、発表者だけでなく生徒全員でいいなんゼミを作ることにもできた。2月後半には「出前いいなんゼミ」という形で連携中学1年生とも交流した。

【いいなんゼミの発表タイトル】

- ・前半4発表(1画面)
 - 「ジャグリング」、「食育紙芝居」、
 - 「Do it yourself!」、「地域のことを物語にして語ろう ～小津安二郎編～」
- ・後半4発表(2画面)
 - 「飯南飯高に恋した高校生が地域の魅力を発信してみた」、
 - 「理想の介護施設を考える」、
 - 「シミュレーションアプリを用いたバーチャル株取引」、「オノマトペ」



図10 分散会場からのZOOMによる質問

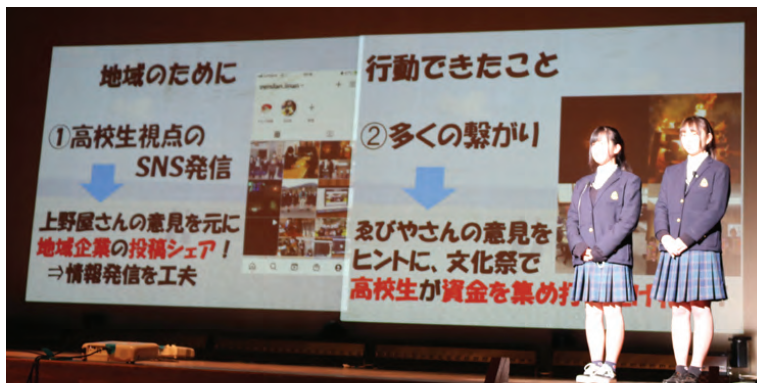


図11 いいなんゼミ発表の様子

④いいなんゼミ報告書

個人の研究内容をまとめた「いいなんゼミ報告書」は、これまでA4縦の用紙にワードを使用して作成していた(図12)。2019年度からは書式の改善に取り組み、振興局や店舗などのちょっとした待ち時間に地域の方が手に取りやすく、読み手の見やすさやわかりやすさも意識した報告書として、A4横の用紙にエクセルを使用して作成した(図13)。しかしエクセルであるが故に、文字入力や写真の添付、グラフの見せ方などで上手くいかない点が課題であった。

今年度は新たに書式を見直し、A4縦の用紙を2段組にしたワードでの作成へと変更した。さらに、報告形式として新たに「キーワード」を冒頭に加え、研究内容を検索しやすくした。また、いいなんゼミノートと合わせ、1研究の背景と目的、2研究の方法、3研究の内容、4まとめ、5今後の課題、＜引用参考文献＞と書式を統一した(図14)。

ソフトウェアをエクセルからワードへと変更したことにより、パソコン画面に表示された通りにプリントアウトされないという問題については改善された。また、グラフが昨年度より大きく表示できたことで、データを用いた研究に見応えがみられた。しかし、生徒が文字数に合わせた画像サイズの変更ができないなど操作の習熟度に関する課題と、キーワードが適切に設定できないことからキーワードのつけ方について指導が必要であることが明らかになった。



図12 2018年度報告書



図13 2019年度報告書

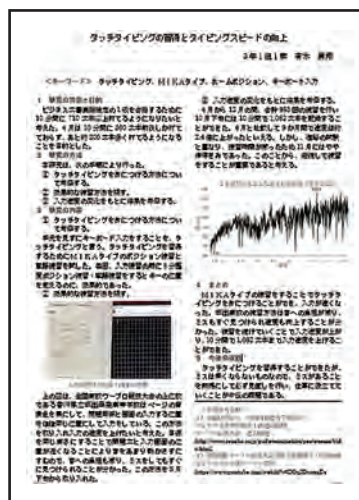


図14 2020年度報告書

(6) まとめ

「問いの立て方」について産業能率大学の皆川雅樹准教授によるワークショップを実施したことによって、「生徒主導の活動にとどまることなく、生徒主導の活動に大人も巻き込んで社会に参画していくことをゴールに置く」ことを、生徒・教員が共通の認識とすることができた。

生徒の研究を進めていくにあたり、大学や地域社会の大人たちを伴走者としてマッチングさせ、早期から取り組ませることが有効であることもわかった。この連携を促進することで、生徒のポテンシャルを引き出すことも可能となる。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で校外に出にくくなった反面、地元企

業や行政・大学・専門学校などの連携をオンラインによる講義としたり、電子メールを介しての指導を行っていただいたりと、新しい生活様式に対応した活動によって地域連携の時間的・距離的へだたりを埋める結果となった。ZOOMによる講義などこれらのことは、今後の学校教育と地域連携のスタイルを示唆する取り組みともなった。また、報告書について様式を変更することで、文字入力について改善を図ることができた。

(7) 今後の課題

探究につながる問い作りについて、「私（自分）の解決すべき課題」から「私たちの解決すべき課題」へ、そして「社会・世界の解決すべき課題」へと発展させるためには、1年生からの体系的な「問いの立て方」へのアプローチがキーポイントであり、問いそのものを再構築していくための仕掛け作りがいいなんゼミのテーマ設定の指導の今後の課題である。

そしていいなんゼミの活動を引き継ぎ深化させるためには、プロセスの共有とプロダクトの継承のためのICT活用が不可欠である。Society 5.0で実現する社会、IoT (Internet of Things) に向け、すべての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有される仕組みを早期にネットワーク上に構築し、生徒・教員間でいいなんゼミの取り組みのプロセスを蓄積・共有し、プロダクトを継承可能なものにして行くことが、本校における地域連携を活性化させるためには必要であると考えます。

さらに、地元企業や行政・大学・専門学校などの連携について、オンラインによる講義や電子メールを介した指導など、新しい生活様式に対応した活動をさらに充実させていく必要がある。加えて、教員の役割として、自走する生徒を育て、支援し、伸ばしていけるよう、伴走者と生徒の両者を支えるファシリテーション力の向上が求められる。教員の在り方・関わり方については引き続き今後の課題である。